［鸞音忌無窓忌講演］
「無窓」とは

宗　正元

一

大地の会という場所で、久しぶりにみなさん方とお会いする機会をいただいたわけでございます。今日は「鸞音忌無窓忌」にちなんでというのでしょうか、何か話をするようにと、こういうふうに事前にいわれていたんですが、じつはこの大地の会が生まれましたのは、今日もここに宮城さんが来ていますが、宮城さんとか私とか数人の、その当時三十代でございましたけども、まあ、三十代の我々が親鸞聖人の教えを本当にいただいているだろうか、あるいは今日の時代を親鸞聖人の教えを通して生きるということはどういうことなのか、そういうことについていろんな戸惑いもあり、何かもう一つ腑に落ちないといいましょうか、そういう様々な問題を抱えておりました３０代の私どもがですね、やはりこれを機に、改めて如来の本願を聞く、如来の本願に生きる、そういう道をお互いに学び取っていこうじゃないか、ということでこの大地の会が生まれました。その時に、それでは、どういう先生から如来の本願を聞く、そういう講義をしていただくかということもいろいろ話し合われたり、話し合うというよりも、それこそ数人のもの、私どもの中で念じられておったと申しましょうか、そういうことが実際には具体化したわけなんですが、やはり今日の時代というものに立って「なんまんだぶつ」の道を歩いてくださっておる、そういう安田先生からお話を聞いていこうということでこの大地の会が出発したわけであります。

そういうわけで当初は十日間でありましてですね、それもはじめにですね、ほんとに聞くならやっぱり自分の生活全体をかけて聞かなきゃならんじゃないか。一ヶ月ぐらいですね、みんな３０代でしたから、もう家庭もあり子供もあるくらいの年代だったんですが、ほんとに聞くということならばやはりそれだけの覚悟を決めて出発しようじゃないか。一と月ぐらいはほかのことを一切中止して立てこもるというような、今から思いますとよくもああいうことを私なども思っておったと思うんですけどね。まあとにかくそういうようなことが、具体的には実際問題としてなかなか無理ということもありました。第一、会場、場所をお借りするということさえ容易でないということもありまして、たまたま十日間、最初は合宿、泊まり込みでした。外には一歩も出ないと。十日間泊まり込んで、その当時、現在の真言宗の東寺ですが、東寺の方々の、なんていいますかね、支援といいましょうか、それならば是非私どもの所をお使いくださいというようなこともありまして、会が出発したわけなんです。

その中の五日間が、午前午後、毎日安田先生でした。そして先生の先生ですね。やはり私どもにとって善き人といわれる方々は、少なくともやはり善き人をもっておられる方々ですね。そういう意味でも、安田先生にとっての先生がまだ生きておられました。曽我先生とか金子先生ですね。そういうことで曽我先生、金子先生にも一日ずつ出ていただきましてお話を聞かしていただきました。その曽我先生がやがて亡くなられました。その曽我先生が亡くなられたことをきっかけにして、その翌年から「鸞音忌」という名でですね、これは今日も和田先生がお見えですから後でお聞きしようと思っているのですが、どうして「鸞音」という名前が生まれたのかですね。曽我先生ご自身がこういう鸞音という名を自らの号となさったのか、それとも「鸞音会」という会が開かれておったようでありますから、先生を中心にした会の名前が鸞音、まあそれも曽我先生がお付けになったかもわかりませんが、その辺も私自身がまだ全く仏縁がなかった時代のことですから知らないわけですけれども。

とにかく、誰が言い出したともなくですね、曽我先生が亡くなられたその次の年から大地の会では、聞法会の中の一日、時間をもうけて鸞音忌をお勤めしてきたわけであります。しかし、それはなにも大地の会だけが鸞音忌を勤めて先生のご恩を思い起こすということではなしに、曽我先生とのご縁が深かった方々のところでは、やはり鸞音忌を勤めておられたようであります。今日はどうなっているか知りませんけどね。
で、その鸞音忌を記念して安田先生が、曽我先生のご恩ということを中心にして、毎年テーマを掲げてお話

くださった年もありますし、とにかくその後十年間大地の会で毎年鸞音忌記念のお話というものが一日ございました。それは昨年、十回分がまとめられて本になっております。そしてその安田先生が亡くなったわけですが、もうすでに今年で十四年目になるわけですが、安田先生が亡くなられました後、翌年から、今度は「無窓忌」という、こういう名で安田先生のご恩を思い起こすお勤めをしてきたわけです。私たちは、安田先生にどういうご恩をいただいておるのかということを、私も１回か２回、この十四年の間にお話しさせていただく機会があったのですが。

この「無窓」ということについては、安田先生ご自身が号として、お書きになったものなどに判を押しておられます。ですから、ずいぶん早い時期に先生はこの「無窓」という号をお使いになっておられたのですが、どういうことが縁になって、安田先生ご自身がこの「無窓」という言葉を取り上げられたのか、そのことについては私は聞いておりません。そういうことをお話ししていただく機会はありませんでした。その「無窓」ということを取り上げられた頃、その当時、先生のお話を聞いておられた方々はお聞きになったかもしれませんけれども、私が安田先生のお話を聞くようになりましたのは、先生がもう六十に近い頃、大体私は安田先生の話を二十五年ぐらいご縁があったんですが、ですから、もうすでに晩年ですし、「無窓」ということをどういうわけで自らの号として取り上げられるようになったのか、そのことを詳しくお話を聞いたりすることはないままに過ぎてしまいましたので、その点は分からないんですけれども、結局こうして「無窓忌」という名で、先生のご恩を偲ぶ会が毎年じつは開かれているわけであります。

考えてみますと、そういう名前が出て参りますのは明治時代の清沢先生ですね。清沢先生は「臘扇忌」ですね。この「臘扇」というのは清沢先生自らが自分の号として、清沢先生は何度も自分の号を、四十歳くらいまでのみじかい一生涯ですけども、何度も号を改めておられる。その時その時、自分のこういう道を生きるんだとかね、なにかその時その時の自分のお気持ちを号にしておられます。こういうことも珍しいですね。最後が「臘扇」、十二月の扇子のことです。役に立たなくなったと、世間の役に立たなくなったと、こういう意味を言葉に表してある。それが清沢満之先生の最後の号である。そういうことから清沢先生のご恩を偲ぶ会が「臘扇忌」という名で、これは今日もたくさんというわけではありませんけれども、細々ではありますけれども勤められております。ついでですけれども、親鸞聖人の場合は教団では「御正忌」といって名前がないですね。「愚禿忌」といってもいいんじゃないですかね。べつにわざわざそういわなきゃならんこともないのですが、「御正忌」というのは教団だけに通用する言葉で、親鸞聖人はもう教団の人、教団のものではありません。教団にとってはかけがえのない方ですけれども、しかし教団が所有して教団がただ崇めたてまつる、そういう方じゃないですね。少なくとも世界中の人々と深い縁を結んでおられる方です。まあ現実的にはまだまだヨーロッパとかイスラム世界の人たちとのご縁は薄いですけども、しかしそれはまあ、まだまだご縁が開かれてないというだけであって、いずれこれからいよいよ深くなって行くんではないでしょうか。キリスト教の方々はもちろんのこと、もっとイスラムの世界の方々ですね。そういう方々と非常に深い縁が結ばれていくのじゃないかなと、そういうことを僕は感じますけども。そういう意味で申しますと、親鸞聖人をそのまま表しているような名としてはいろいろな名がございますけど、やはり何といっても「愚禿」でしょう。善信とか親鸞という名も、それはそれで大事なことが言い表されてありますけども。

まあ、とにかく、こういうことも偶然のようであって何か必然的な意味を僕は感ずるんですよ。それはまあ、清沢先生とか曽我先生とか安田先生に縁が深い方々がたまたまそういうふうに「臘扇忌」だとか「鸞音忌」だとか「無窓忌」だといって取り上げておるんであってと、一応事情としてはそういうことですけれども、だけどやはり、人類の歴史の中に開かれておる大事な「忌」ではないでしょうか。「臘扇忌」とか「鸞音忌」とか「無窓忌」というのはですね。そういう意味をもっておる。ただ、たまたま縁を結んだものが懐かしく先生を思って、何かそういう懐かしさで法事を勤めご恩を偲んでいると、そういうようなものにとどまるものではなくて、ほんとに偶然たまたまそういう形で、形はそういう形なんだけれども、意義はもっと広くそれを越えておる。もちろん歴史家の方が取り上げてくださるという、そんな表面には出てこないかも分かりませんけれども、だけども非常に大事なことがたまたまこういう形で姿を現しつつあるのではないかなということを最近思うわけでございます。

二

まあそういうことで今回はとくに安田先生が「無窓」という号を名乗られた、もちろん、そのことについて、私自身は先生からなにもお聞きしてはおりません。お聞きしてはおりませんけども、ただ先生がやはり無窓という言葉にちなんだ問題ですね。それはどういうことかといいますと、じつはこの「無窓」という言葉は今から二百年ほど前に、ドイツに生まれた哲学者にライプニッツ（Leipniz）という人があるんです。ただ、この人はたんなる哲学者というだけでなくて、数学者でもあり物理学者でもあるんですね。しかも驚いたことに歴史学者でもある。政治学の分野でも大きな仕事をしている。法律学、さらにキリスト教の神学をきわめるというようなことですね。本当に多彩といえば多彩、多方面に活躍した人なんですね。ただ大学の先生という形で大学に収まっておった人じゃなくて、外交官としても活躍した人なんです。珍しい人ですね。

そのライプニッツという人が、人間の本質といいましょうかね、人間の問題を取り上げておられる。その中心になっているライプニッツの論といいましょうか、それは「単子論」といいまして、英語でモナド（monado）という言葉ですけども、日本語で翻訳されているのは「単子」という言葉で翻訳されているのです。原子と区別している言葉です。今日の物理学では、原子よりももっと小さな単位ですね。ものを成り立たせている要素として、一番小さい単位としては原子というものが取り上げられておったんですが、そういう時代はもうずいぶん前の話であってですね、今日ではそれよりもっともっと小さな単位といいましょうか、要素というものがいろいろ研究されておる時代です。まあそのことは私は詳しく知りませんから、とりあえず原子という言葉のところでとどめておきますけれども、原子のほうは物質を表すのですね。それに対してたんなる物質ではない。物質と無関係ではないけれども、ちょうど遺伝子のような、遺伝子というのもたんなる物質ではないですね。物質のもっておる、まあＤＮＡという物質の中に遺伝子という働きをするものがある。そういうことで遺伝子ということが取り上げられますけども、あれも遺伝子という言葉はふさわしくない、「生成子」といった方がいいんだということも、これはこちらの高槻の方に「生命誌研究館」というものが出来ていますが、そこの副館長をしている中村桂子さんという人が遺伝子研究では非常に大きな仕事をしておられるこの方が、生成子といった方がいいんじゃないかと。遺伝子というとどうしてもただ遺伝というような感じになりますが、むしろ作り出していく、人を人として作り出していく、生成するというこういう言葉で言い表している。

つまり物質といえばＤＮＡが物質なんですけども、ＤＮＡという物質がすべて生成子とか遺伝子といわれるものではなくて、ＤＮＡという物質の中にこういう働きをするものがある。しかも不思議なことに、その物質の中にもどこまでも人間を生み出していくという、そういう働きをするグループ、猿なら猿を作り出していくという働きをするグループ、そういうグループを中村さんは「ゲノム」という言葉で呼んでおられますけれども、ヒトゲノムとかサルゲノムとかいってですね。そういうような、ただたんなる物質ではない。そこに何か生命、生き物を作り出していくような働きというものが、その物質を通して現れてくる。そういった問題が今日取り上げられております。だけど今ですね、ちょっと話が戻りますけれども、この単子という言葉で、モナドという言葉ですけども、これはたんなる物質、原子とかそういう意味の物質ではなくて、やはりそこに精神的といいましょうか、もっといえば一人の人ですね。人間一般ではなくてですよ、いま遺伝子の世界でも問題になっているらしいですけども、「ヒトゲノム」といって人を生み出すということについての働きみたいなものが研究されているけども、人といっても一人一人違うじゃないか、一人一人違ってくるのはどういうわけか。なかなかまだ十分に解けない問題のようですね。人といっても同じ人間じゃない。もうまったく、どの人をとっても人が一人一人違っておる。そういう一人一人が違っている、固有ですよね。そういうことがどういう力でそうなっておるのかですね。この辺になるとまだ解けない問題があるようですね。それでまあ免疫というようなところからそういう問題に取り組まれているようですね。科学の世界でも本当に苦労して、いったい人間とは何か。さらにいえば、人間といっても一人一人違っている。どういうわけで、どういうことによってそういうことになっているのかですね、そういうことについての研究というも

のがずいぶん進んでいますけれども。

三

ライプニッツのこの「単子論」というのは、もう二百年も前の話なんですけれども、ほんとに一人の人が一人の人になっていく、固有のですね。そういう働きをするもの。そもそもモナドという言葉そのものはヨーロッパでは古い言葉なんですね。ライプニッツという人が初めて使ったというそういうことじゃなくて、ギリシャの時代からある言葉ですね。要するに単なる物質ではない。宇宙といいましょうかね、宇宙を構成しているようなそういう要素、宇宙を作り出してくるような世界といってもいいわけでしょうが、人間の世界なら人間の世界と、そういう世界を作り出してくるような働き、そのものの働きをモナドという言葉で言い表していたようですけれども、その言葉を取り上げてライプニッツという人が、さらにその内容を明らかにして行かれるその中に、無窓、「窓がない」ということがあるわけです。

だからこういうモナドということで、何か人を人として成り立たせておる、人そのものといいますかね、たんなる物質という意味でなくて働きですね。人を人として成り立たせておる、人そのものというような意味をもった働きですね。それを働きとしてライプニッツはモナドという言葉を使っているわけですね。人そのものを言い当てる言葉といってもいいかも分かりません。その働きを窓がないというこういう表現になっているのは、外のものの影響を受けない。どこまでも自発的であり外のものに影響されて動くというよりも、どこまでも自発的。そういう意味の働きを表す言葉として「窓がない」という、こういう表現でライプニッツは言い表しておられる。つまりどこまでも独立していく、一人立ちしていくといいますかね、そういう意味の働きを窓がないと、こういう言葉で表現しているわけですね。

四

安田先生がどこに注意しておられたのか、私自身が直接聞いているわけではありませんから、そこは安田先生の気持ちはどうであったかということは私には分かりませんけれども、しかしどうも安田先生の教えを受ける中で、痛感させられてきたことなどをいろいろ思い起こしたりしますと、他力の信心を表されるのについても、「自律の信」というようなですね。曽我先生は信について「恍惚の信」か「自覚の信」かというようなテーマで、信は信でも自覚、他力の信心はですね、目覚めると。自分自身に目覚めると。自覚は自覚でも自分自身に目覚めるという意味の自覚です。私が何かを自覚するというそういうことじゃない。一般に私たちが生活の中で使っている自覚という言葉は、私が何かを自覚する。もっと自覚して何かを行わなきゃならんとか自覚という言葉をしきりに使いますけども、その場合は私が何かを自覚する、何かのことについてもっと自覚してもらうとか、そうではなくて自覚の信というときには、何かを自覚するのではない、自分自身です。自己に目覚めると。恍惚の信か自覚の信か。神様を信ずるとか仏様を信ずるとか何か信仰というけれども、いったい私どもはどうなっておるのかという一つの問題を押さえてくださっているテーマですね。

恍惚の信は信仰といっても自分自身が見失われてしまう。陶酔したりいい気持ちになるとか、そういうような気持ちの中におぼれて自分を見失う。自分がはっきり見いだされるのでなくて自分が見失われる。どういう身なのか。特に自覚の信といわれるときに大事なことは「分限」という言葉ですね。自己に目覚めるといったってどういうことに目覚めるのか。たんなる自分の性質とか能力とかいうような意味じゃないですね。どういう性質なのか、どういう能力を持っているのかという、たんにそういうことじゃない。そういうことも包まれますけども、一番大事な内容は「分」でしょう。今日の言葉で言って「分限」でいいんですけども「制約」といい変えてもいいかもしれません。どういう制約をもっているのか。つまり時代の制約ということもございましょう。

制約にもいろんな内容がございますけど、無制約ではないです。人間とこういったって、無制約の、何の制約もない、ただ人間という抽象的な人間じゃないです。つまり今日の時代なら今日の時代という、そうい

う時代を生きている身です。たんに人間ではない。同時にそこに民族の子という意味もありましょう。日本の民族とかあるいは日本でなくても種々様々な、そして民族という時にはそこに文化もあり民族の精神みたいなものもあります。民族に伝承されているものの考え方とか暮らし方とかですね。そういう民族の子でもある。時代の子でもある。民族の子でもある。

さらに一番身近なところでいえば誰かの子です。誰の子でもないというそんなことじゃない、誰かの子です。親がいます。必ずしもすばらしいとかということでなくて、どういう人であれ誰かの子です。そしてやがて結婚したりすると誰かの夫であったり誰かの妻であったり、子供が産まれれば誰かの親になります。そういう制約をもっています。そういうものを取りはずして人間として生きている訳じゃない。現に生きている身といったら、いろんな制約をもっています。まずそういう制約に眼を開くということでしょうね。だから、よく親である前に人間であるなどといわれる人がいますが、僕はおかしいんじゃないかと思いますね。親である前に人間であるというそんな人間がどこにいますかね。子供である前に人間であるなどと、そんな人間がどこにいますかね。それは考えた話であって実際にはどこにもいない。幻想みたいなものでしょう。現実に生きているのは誰かの親であったり誰かの子であったり、民族の子であったり時代の子であったり、そういう分限がある。それが自覚されれば、そういうことがはっきりと自覚されることによって、それのもっておる意味です。使命とか意味ということが初めてそこから見いだされてくる。そういう分限、制約というものが自覚されないと、人間なんだ人間なんだと百ぺん繰り返してみたってそれは観念です。幻想です。

なにかそういうふうに流れがちな私どもをですね、もう一つ具体的、現に生きている身、それこそ清沢先生のお言葉ですけども「現前の境遇に落在する」と、ああいう「現前の境遇」という言葉で言い表しておられる。まあそういう恍惚の信でない自覚の信なんだということをとくに取り上げてくださっているのが曽我先生ですね。そういう曽我先生の教えを受け、曽我先生を通して安田先生が今度は「自律の信」といわれるんですね。もちろん、この自律の「律」は何によって律するのかといえば、本願です。世間のものの考え方、世間の価値観・善悪についても損得についても、世間の価値観というものがあるわけですけども、そういう世間の価値観で身を律するというのでなくて、本願、如来の本願による、こういう自律の信です。なにかそういうような問題を取り上げてくださっている方として、安田先生はライプニッツに共感なさったんじゃないですかね。そしてむしろ積極的に、そのヨーロッパの歴史の中から生まれてきた、ヨーロッパの人々と共感していく、そういう世界、そういう道を念じながら「無窓」という、こういう言葉が選ばれたんじゃないかなと。まあ別に安田先生がそこまでお考えなさらなくてもいいんですけど、無窓という言葉に触れた私の方がそういうことをじつは感じさせられるわけです。

なにかえらい言葉がわかりにくい言葉ですね。「無窓」と、これだけ聞いても何をいっているのか、窓がないというのは何だろうというような、ストレートに言葉そのものが、日本語としてね、ストレートに訴えかけてくるようなそういう意味をもっておりませんので、直接には分かりかねるものがあるんですが、ただ、今申しましたような、ヨーロッパの歴史の中に生まれ出て下さった人々の中に、先生が共感していかれたのは、それはなにもライプニッツだけじゃないですね。いろいろな方々を安田先生は取り上げられますけど。ただ、安田先生の話の中にイスラムの方々は出てこないのですね。まだ残されている世界があるなあという、それは安田先生が不十分ということでなくて、今日の私どもに託されておるそういうことを感ずるわけです。

五

ライプニッツがモナドという言葉で取り上げておる人間そのものとでも申しましょうか、人間を成り立たせておる人間そのもの。ものといっても物質ではなくて、働き、力といってもいいんでしょうが。そういうことをモナドという言葉で取り上げてあるんですが、その働きについて先ほど申しましたように「窓がない」と。窓がないというのはどこまでも自発的、外のものに動かされるのではなくて、自らを表していくという意味なんです。僕はドイツ語が十分に出来るわけではありませんから、ライプニッツの原文を読んでいるわけではありませんが、翻訳されたものを読みかじって、これは翻訳としては適切であるのかないのかと、勝

手に想像しながら読んでおるんですが、ほんとはドイツ語の原典を自分で読んで、翻訳されておるものが適切ではないなあと思うならば、それをはっきりさせれば一番いいんですけど、翻訳されている文章がどうももう一つ何を言っているのか、靴の底から掻いているような言葉が多くて困ってしまうんですが。

そういうことで、これが適切な表現かどうか分かりませんが、少なくとも窓がないということで表されていることは、自己を表象する、表象といってもいろんなことを表象するのではなくて、私どもは何かを見れば、見たことがそのまま映像となって表されてきますね。それを言葉で表現したりいろいろするんですが、そういうことを表象といいますけれども、そういういろいろなものを表象するのでなくてどこまでも自己を表していく。いろんな出来事に触れては、いろんな生活の中でどこまでも自己を表象していく。まあ見いだしていくといってもいいでしょう。そういう表象と意欲というような言葉の内容、私ども人間に与えられておる力とでもいいますか、人をして人たらしめているような、そういうものを「モナド」という言葉で言い表しながら、そのことを「窓がない」といっているわけですね。

同時にそれだけじゃないんですね。とくに自己表象というこういうような意味だけなら、今日ではエリクソンのアイデンティティという言葉が非常にはやっていますね。「同一性」。「自己同一性」。このごろの本とかニュースを聞いておりまして、アイデンティティという言葉が出てこないようなものはほとんどないですね。たえずいろんなことについてアイデンティティという言葉が使われています。結局何をいっているのかわからんことにもなりますけども、あまりにも日本語離れした言葉が多くて困ってしまうんですが、あの言葉も分からない言葉ですね。アイデンティティ、分かったようなつもりで聞いたり、分かったようなつもりで使ったりしておるわけですけれどね。大体そういうことを言い出したのがエリクソンだけど、エリクソン自身はまだよく分からないと。アイデンティティとはどういうことかといわれたら、よく分からんと。日本人は早とちりが多いですから、分かったようなつもりで言葉を使ったりしておりますけども、何でもそういうことかも分かりませんね、当の本人はそういう言葉で言い表しておられる当の本人は、まだまだそこに問題を抱え、十分に言い切れていないものを抱えながら表現して下さっているのに、聞く私どもは、もうすべてがそれで分かったようなつもりで聞いてしまうということが、往々にしてあるのではないかと思いますね。

ですからエリクソンのことがよく取り上げられるのですが、もう二百年前にライプニッツがこういう形ですでに言い表している問題なんですね。ただライプニッツの場合はそれだけで終わっているわけではない。もう一つですね、これも日本語に翻訳されている言葉ですけども、「生ける鏡」という翻訳なんですね。これもどうかなあと思うんです。「窓がない」、こういう言い表し方で先ほど申しましたような、どこまでも外のものに影響を受けるというよりも、いろんなことに触れるごとに自分自身を表していく。自分自身を実現していこうとする、そういう面を「窓がない」という言葉で表現しているのですね。たんにそれだけじゃない。今度はもう一つは「生ける鏡」という、こういう翻訳が適切なのか私は原語を見ていませんから分からないんですけどね。これはどういうことを言っているのかといいますと、それぞれのモナドという言葉で言い当てられておるそういう働きですね、自分自身を実現しようとするそれは、互いに他のモナド、それぞれがそういう意味では無数にあるわけです。モナドとこう言い表されているものは無数に、それぞれの人のところにある働きですから、それぞれの人が互いに他を映し出すような働き、あるいは他の中に自分を見るといいますか、映し出されている。交互に映し合う。これはみなさん方も本で読まれて知っているでしょうが、曽我先生がよく「合わせ鏡」と言われるんですね。ああいうような意味ですね。互いに映し合う。つまり他の中に自分自身が照らし出されてくる。ではその他はただ人を照らし出しているだけかといえばそうではない。その他はまたその人を通して照らし出されている。交互に照らし合う。何かそういうことがあらかじめ定められておるかのようなあり方をしておる。それでライプニッツという人は「予定調和」といっているのです。

言葉の中では「和合」というような言葉も出ています。つまりあらかじめ定められているかのごとく、それをライプニッツの場合は神があらかじめ定めて下さっているのである。こういって、どういうわけかそういうふうに調和しているその調和という意味が、互いに照らし合うと。互いに照らし合うようなそういう関係を持っている。またそういう互いに照らし合うようなあり方をするのが、いわばモナドという言葉で言い表される人間そのものですね。それが人間の本質だと、こういう意味を明らかにしようとしている人なんで

すね。だから、たんに「窓がない」というこの言葉だけですと、なにか外のものと切り離されて、外のものから窓を閉ざした自分だけのように感じますが、自己実現といっても他に照らし出される、互いに照らし合う、こういうあり方をしている。それを人間の本質として見いだしているわけです。そういうふうに、人が神によってそのように作られているという意味でライプニッツは、予定調和という言葉を使っているわけですけども。

六

ですから安田先生が「無窓」という言葉をわざわざ取り上げておられるのは、いわゆるその人がその人として自立していく、自己を実現していくということが、ただ他の人々と切り離して、他の人々と無関係でというのでなくして、むしろ他の人々と照らし合う、そういう関係を言い表す言葉というのが「和合僧」という場合の「和合」という言葉なんでしょうけど、この和合という言葉はなかなか面倒な言葉ですね。もっといい言葉はないかなあと、僕は言葉の数が少ないものですから、なかなか行き当たらないのですけど、和合というようなことを、もっと言い当てる今日の言葉はないのかなあと思うんですけども。

とにかく生ける鏡、鏡だと。存在を鏡として、人そのものの本質、本質という言葉もよくないけど、人を人たらしめるものですね。ほんとにその人を人たらしめる、そういう働きを鏡として言い表している。こういうことが無窓という言葉の内容としてじつは包まれているわけです。まあこういうことをわざわざ申し上げるのは、私自身がライプニッツを詳しく研究しているわけではありませんが、読みかじりの程度ですからライプニッツがどうだということを申し上げる力はありませんけれども、やはり私自身が安田先生の教えを聞くようになってから、私の中に根を張っているといいましょうか、定かでない、もやもやしているそういうものを照らし出して下さったことがたくさんあるんですけども、まず、一番大事なこととしては、ちょうど私自身が安田先生の教えを聞くようになりました頃は、先ほども申しましたように先生の晩年五十代の後半からそれ以降亡くなられるまで縁があったんですが、そのころ先生がしきりに強調しておられましたのは「僧伽的人間」ということなんですね。一般的には修道的人間といいますかね。道を求め、道を修める、それが人間だと。人間の成就ですわね。人に生まれてきたということの成就は道を求めていく人になる。道を求め道を修めていく人になる。こういうことを言い表している言葉が修道的人間ということなんですね。それもただ個人じゃない、「僧伽的人間」と、こういう言葉を重ねてよく強調して私どもに教えて下さった。
で、その頃の安田先生がいつも、それこそいつもご自分が身をおいておられましたのは「相応学舎」という学舎です。もちろん時おり外にも出かけて行かれますけれども、ほとんどこの学舎におられました。その相応学舎の機関誌が『僧伽』という機関誌でした。雑誌ですね。ですから私が先生に縁を結ぶようになる以前から、すでに繰り返し繰り返しもっぱら「僧伽」ということを大事なテーマ、もっといえば人間の成就ですね。しかし、僧伽という言葉を聞いてもこの言葉がまたすぐ分かるような言葉じゃない。翻訳すれば和合衆ですけどね。和合衆ではもう一つ翻訳し切ったとはいえない、また和合衆とはなんだと、またそれを考えなきゃならない。「僧伽」というのは、もちろんこの字はご存じの方ばっかりかと思いますけど、samgha というサンスクリットの言葉を、ただ漢字に言い表してあるだけの話であって、僧伽という文字に意味があるわけではないですね。だから漢字でその意味を表すとすれば和合衆。じゃあ和合衆というのはどういう人々のことを和合衆というのか。ただ喧嘩もせずに仲良く暮らしているのが和合衆なのか。その辺がですね、日本で和合といえばだいたいそういうことを言いますよね。和やかにいきましょう。あい和して生きましょう。普通そういうときには、もう反対意見も何もなしに、一つのことに全部まとまって文句も言わない、仲良く、とにかく一つになっていくという意味が主に強調される。

ただ、和合衆という場合はたんにそういう意味じゃないですね。だけどもし仮に一つのことにというなら、その一つのことというのはいったい何か、そういうことが大問題でしょう。ただ何でもいい、一つになるというのでなくて、一つということがなけりゃ和合ということもないのでしょう。その一つというのは何を表すのか。何が一つなのか。少なくとも「なんまんだぶつ」の道が教えて下さる一つとはそれこそ「なんまん

だぶつ」でしょう。本願に帰すると。その一つを教えて下さっているわけですね。何かいろいろあるんじゃない。人生にとって人が人になる。この世に生まれてきたということが成就する。ただ一つのこと、それはどのような境遇に生まれようと、つまり人を選ばずでしょう。老少善悪を選ばずと。老少善悪を選ばずにその老少善悪が成就する、そのままですね。そのただ一つのこと。少なくともそういうことを明らかにして下さった伝統が「なんまんだぶつ」の伝統じゃないですかね。ですから自ずからそこに和合ということが出て参りますね。一つということが定まらなければ、和合ということがその時その時いろんなことによって動きます。今日はこのことについて和合しましょうといってですね、まとまる中心がいろいろ変わっていきます。「なんまんだぶつ」の本願が、それがただ一つのことになっている場合の和合というものは、疑いを取り除きません。排斥しません。信ずるものだけが一つになると、そういうものじゃない。

七

ただ天親菩薩と曇鸞大師によって明らかにされてきたいわゆる『論』『論註』ですね。『論』『論註』を通して明らかにされている本願の和合僧、和合衆といいますかね、それは二つの言葉で言い表してありますね。一つは「大乗正定聚の数に入る」これは『教行信証』の「証の巻」に親鸞聖人が『浄土論註』の文をながながと取り上げていますが、その最後の「利行満足章」と呼ばれているところですけれども、そこに五功徳門のことが取り上げられています。つまり念仏によって開かれる功徳です。信心で申しますと一心帰命の心に、つまり「なんまんだぶつ」によって開かれる功徳。つまり私どもが念仏申す身になる。念仏申す身になることによってそこに開かれてくる功徳。功徳というのはたんなる人徳というものじゃないですね。なかなか適切な、功徳という言葉の内容がいろんな内容を包んでいまして、一言でいいにくいんですけども、まず端的にいえば力ですね。どんな力かというと、生を支える力です。何かの、経済力とかそういうような意味の力じゃない。生そのものを支える力。生死を含めていえば生死の生を支える力。生まれて死ぬ、迷う、そういう生死の生。

とにかく功徳を表す言葉として、第一が「近門」という言葉で表してある。「近門」ということの具体的な内容は「正定聚に入る」と。第二は「大会衆門」、こういう独特の言葉ですね。功徳を五つの内容で言い表してある。五功徳門とこう呼ばれますけれども、その第一が近門。第二が大会衆門、こういう言葉で言い表してある。その第一の近門というのはどういう功徳かと。それは正定聚に入る。正定聚に入るということは、もう一つ言葉をつないで言いますと正定聚の数に入る、そういう意味なんですね。つまり正定聚ということは、仏になることがまさしく定まった人々、つまり仏の心を生きておられる人々、仏の心に帰し、仏の心に生きておられる人々、それがまさしく仏に成ることの定まった人。つまり仏の心から出発しておられる人ですわね、正定聚というのは。仏になろうと仏を目指している人々ということではありません。必ずしもね。仏を目指していく人は、いったいいつ正定聚になれるかといえば、正定聚になれる保証はない。途中で転落するかもしれない。仏とは似ても似つかないものになるかもしれない。そういう問題を身をもって教えてくれたのが麻原彰晃氏じゃありませんか。笑えない事実ですわね。ほんとに仏を目指したのかと、そこまでいう人もいらっしゃるかもしれませんが、あまりそこまで詮索しなくても、まあ仏を目指したなら目指したでもいいですわね。だけど目指せば必ずなれるというものではない。どんなに努力してもね。

そういう問題を取り上げて下さった方が龍樹菩薩ですわね。龍樹菩薩のような能力のある方が、修行する力といい学問の力といい、大変な能力を持っておられる方が自ら問題にしておられる。どうしても退転してしまう。仏を目指して歩み続けていくといっても、それがどこかで足が止まったり、歩み続けていくということがとても困難。そういう困難な内容を取り上げて教えて下さっているのが龍樹菩薩です。龍樹菩薩は「易行」ということをいいますが、易行ということは仏から出発する道ですからね。仏を目指す道ではない。「なんまんだぶつ」を易行として教えて下さるのは大きな方向転換です。今まで仏を目指して努力するとか修行しておった。仏を目指して仏になれるというのはほとんど不可能である。全然ないとはいえんのでしょうけどね。では、不可能なものにとっては、もはや仏道はまったく我らの道ではなくて遠い手の届かない道なの

かと、そういう問題にぶつかってですね、一転して仏から出発する。そういう道を、そこに呼び返して下さる「なんまんだぶつ」の道に眼を開いているわけです。私から出発するんじゃなくてですね。それを「信方便の易行」という言葉で言い表してありますね。

だから正定聚といえば、この言葉そのものからいえば、仏になることがまさしく定まった人。まさしく定まった人とはどういう人かといえば仏から出発している人です。凡夫であろうと何であろうと、仏に帰し仏の心から出発している。仏の心によって立つ、仏の心が帰依処になっている。目標ではないんだ。仏の世界が目的とか理想ということじゃないんです。むしろ仏の世界が帰依処として見いだされている。また帰依処となるような仏が見いだされてくる、こう言ってもいいかもしれませんね。なにかこう、仏様というと、ともするとお釈迦様というと帰依処ではなくて大理想、人間の大理想を成就しておられるようなそういう人として尊ばれたり仰がれたりするのです。

今日、あまり四聖ということを聞きませんけど、昔私が小学校に行って教えていただいた教育では、世界の四聖、４人の聖者ですね。四聖として孔子とお釈迦さんとそのころはムハンマドをマホメットといっていましたが、今はマホメットといわずにムハンマド、だんだんイスラムの言葉に近い言い表し方になってきましたけども。だから私にはマホメットという言葉が先に頭に入っているものですから、なかなかムハンマドということが身につかないですね。何か違う別人のような気がしてですね。まあとにかくそういうマホメットですね、イスラム。そしてキリスト教のイエスキリストですね。それから儒教の孔子。仏教のお釈迦さん。そういう人たちはやっぱり聖者です。帰依処ではないですわ。帰依処じゃないから聖者であったり礼拝の対象であったりするわけでしょう。尊敬すべきね。そうじゃない。

阿弥陀仏は、たんなる礼拝の対象ではない。つまり私どもの縁の下の力持ちになってくれる、私どもの大地となるようなですね。どのような人にとっても、どのような人をも支える、どのような人とも運命をともにする、そういう世界こそ私どもの帰れるところです。どんな人をも何の自分を繕うことなしに、ちょうど実家に帰るというか故郷に帰るというような意味ですわね。だけどこのごろは故郷に帰るといっても、錦を飾って帰ると、繕って帰る人もありますが、それが娑婆ですけれども、どのような人であれ、その人と運命をともにしその人を支える。その人の人生を成就する。そういう世界が本当に私どもが帰れるところでしょう。何の計らいもなしに、そこに依って立てると。それが帰依です。なんか無理しないと帰れないとか、依って立つのに踏ん張らなければならんと、そんな所は帰依処といえない。そのまま帰れると。そのまま帰れる場所に触れることが逆にいえばありのままの姿に立ち返らせる力でもある。いくらかでもそういう姿を人間の世界で表して下さるのが私どもにとっての親でしょう。親の前ならそう自分を着飾る必要はないです。好き勝手なこともいえますしね。遠慮する必要もない。つまりあるがままの姿に帰えれるのは親の前です。親の前でも繕った姿をとらねばならんというのは、それはまあ親子の間がかなり疎遠になっているのでしょうね。

とにかく帰依処になるようなそういう仏ですね。そういう仏が阿弥陀仏という名前で表されているわけです。だから阿弥陀仏という仏は礼拝の対象ではありません。たんなるね。礼拝の対象のような形を取っておりますが、礼拝の対象となっているのではなくてむしろ帰依処。もし礼拝というのなら礼拝するというような力もそこから与えられる。つまり、ある特定の対象だけを礼拝するのでなくて一切が礼拝できる。そういうような力もそこから出てくるのであって、礼拝の対象というものはやはり対象に限定されますわ。拝むべきものはこれであるといって、拝むべきものが一つに絞られます。それはそれとして一つの意味を持っていますけどね。とにかく帰依処になるような仏の世界、そういう人がまさしく正定聚といわれる人々でしょう。文字通りそういう正定聚といわれるような人の姿を表して下さっているのが七高僧でありましょう。代表していえばね。

ですから「正定聚の数に入る」というときには、そういう人々を親鸞聖人は善き人々とこう言われますけれども、そういう善き人々が見いだされる。善き人々が見いだされ、善き人々に念じられている身として自分自身が見いだされる。護念されておると。そういうことが数に入るということでしょう。私どもの方から仲間入りしたいといって入れるものじゃない。どうしたら数には入れるのかといっても誰が入れてくれます

か。考えてみたらみんな失格です。仏の心から出発する、そんなことは出来ないだけじゃない、そういう世界を見いだしてないです。　仏という言葉は知っておるかもしれないけども、仮に見いだしていてもすぐ忘れてしまう。そういう私どもをひたすらですね、念じて下さっている。汝に帰依処ありと。あなたを支えている帰依処があるということに、ひたすら呼びかけて下さるし、そこに私どもが立ち返ることをひたすら見守り念じて下さっている。そういうことに私どもが気がつく。だいたいそういうことに気がついた心でしょうが、念仏申す心というのは。念仏申さんと思いたつという心は。だから念仏申さんと思いたつ心というのは、善き人を離れて偶然現れてくるものじゃない。

八

そういうことでそこに正定聚に入るということがまず第一歩です。第一歩とか第二歩とかいうべきではないけど、まず端緒ですね。念仏申す人に開かれる、そこから開かれるといってもいいしそれが念仏申すという姿でもある。端緒。そういう意味を表しているのが『論』『論註』でいえば「近門」という言葉なんですね。近門という言葉で言い表されている功徳です。

やっぱり、こうして大地の会に足を運んで下さる方々をひたすら見守り念じて下さっている、そういう善き人々がいわば今はなき安田先生とか曽我先生とか金子先生というような、この大地の会に足を運んで下さった先生方、近いところではね。遠いところでは清沢満之とか親鸞聖人とかね、さらには七高僧とかそういう方々でしょう。少なくとも大地の会はそういう七高僧につながっている会でしょう。たんなる一民族、一教団だけに収まっているわけではないでしょう。大地の会に集まってくる人というのは、今でこそどちらかといえば大谷派関係の方々が教団でいえば多いですけど、当初はそうではありませんでした。教団でいえば西本願寺の方とか真言宗の東寺の方々とか、あるいはクリスチャンの方とかあるいは無信仰と言われる、ご自身がそうおっしゃるだけの話ですけど、そういう方など、それはそれでいろんなことが縁になっているのですから。

まあとにかく、そういう正定聚に入るということを通して開かれてくる世界です。僧伽といいましても和合衆、正定聚の数に入るということが一つの狭い意味の和合衆といっていいでしょうね。そこに、ただ私個人が生きているのでなくて、師をもち友をもって、師や友を通して生きておる。師や友と無関係に生きているのでなくて、師や友と離れて私は私といっているのでなくて、師や友を通して私が与えられている。この身に分限がありますから、制約の方は一人一人違うわけでありますから、時代も違いますし場合によっては民族も違うということもあるしですね。だから私を生きるというよりか師や友を生きるわけです。大乗正定聚の数に入るということはですね。だからたんなる個人ではない。個は個でも。同時にそこから開かれてくるそういう世界として大会衆門。それは如来の大会衆の数に入るという、こういう言葉で言い表してある。つまりあらゆる人々が如来の大衆として見いだされてくるのです。如来を表して下さる。たんなる大衆ではない。如来の命、如来の精神、如来の智慧をですね。

親鸞聖人はお手紙の中で「ともの同朋にもねんごろのこころ」とこういう言葉で言われます。「ともの同朋」という。懇ろにですね、ともの同朋にかしづくと。ともの同朋と深く交わりを結ぶという言葉でお手紙の中に言い表していますけど、あの言葉にはもちろん、正定聚という言葉で言い表してある内容も包まれておりましょうけれども、もっと広く、如来の大会衆の数に入ると、あらゆる人々をともの同朋として見いだしていく。何のとも同朋かというと、ほんとにこの身を成就していく、この己の人生を成就していくにかけがえのないとも同朋です。ただ仲良くして一しょに生きていくと、そういう意味ではありません。考え方も違うだろうし、民族が違えば文化も違いますし考え方も違います。宗教も違うということがある。現実に自分が所属しているというか身をおいている宗教というのは、イスラムであったりキリスト教であったりね。あるいは仏教であったり、そういうふうに同じ仏教でも様々に違いがあります。そのともの同朋になるということは、何も一しょに仲良くというそういう意味でなくて、己の人生を成就してくださる同朋です。広い意味でいえば、人間を成就してくださるという意味だけど、具体的にいえば己一人の人生をほんとに成就してく

ださる。そういう方々のおかげで今まで考えることもなかったことも考えさせられたり、だから別に敵であろうと味方であろうと、この世においては、場合によっては敵であったり、あるいは味方であったり、場合によっては家族であったり、あるいは敵対関係にある人であったりとか、種々様々です。

いずれにしましても「なんまんだぶつ」によって成就する人間。いったい人間の成就とはどういうことが人間の成就なのか。どういうことが人に生まれてきたことの成就なのか。「なんまんだぶつ」によって成就する人、それはたんに個人的な人間じゃない。どこまでも己に責任をおうていくという意味をもっておる。そういう大事な内容を、安田先生は「無窓」というそういう言葉に共感して取り上げて下さっておるのかもしれないなあと、そんなことをじつは感じたわけであります。同時にそれは、たんに己個人といっても人々と離れない。人々とあい和合していく。これは曽我先生がよくお使いになった「感応道交」という言葉の方が適切なのかもしれませんね。今から思いますと。感応道交していくというようなですね。これは中国の天台大師が使っておられる言葉です。日本では道元禅師です。親鸞聖人にはこういう言葉づかいはない。それを曽我先生はどういうところで着眼なさったのか分かりませんけど、感応道交と。あらゆる人々、人々だけじゃない。生きとし生けるもの、ただ生きている物だけじゃない、山や川もですね。一切と感応道交していく。時間が過ぎました。これ以上くどくどいう必要はないと思いますが、感応道交といっても、ただ感情として情の上で言い表しているだけじゃない。情というものの、もちろんその内容をふまえてほんとにあい呼応していく、つまりそれが一切のものと一つになっていく姿でしょう。

私と一切が別ではない。そういう人生の成就が「なんまんだぶつ」の道によって成就するんだということを、身をもって教えてくださった、そういう一つの名乗りを「無窓」という言葉の中に感ずるわけでございます。